

アサザプロジェクト 日本各地での出前授業 全国に広がる環境学習の取り組み

これまでに全国で300校以上の小中学校で、環境学習を行ってきました。年間延べ1万名を超える児童生徒が学習に参加しています。

継続的な取り組みを行っている事例の中から、今回は3つの地域の事例をご紹介します。

秋田県 八郎潟流域

地元伝承の民話を活かし、広大な八郎潟とその流域を一体のものとして捉え、再生の方法を考える学習
・8～11ページ掲載

長野県 天龍村

希少な渡り鳥がなぜ村を選んで毎年来るのか？ その理由を探ること地元の特徴を活かした村づくりを考え提案します

福岡県 北九州市

都市と干潟や川、里山を結ぶことで、地域の特徴を活かした環境先進都市の実現を目指すまちづくりを提案します
・12～15ページ掲載

宮城県 南三陸町

山と川と海のつながりによって生まれてくる海産物であるワカメやカキのブランド化を通じた復興への取り組み

茨城県 霞ヶ浦流域

170以上の小中学校で行われてきた学習による日本で二番目に大きい湖、霞ヶ浦の再生活動

東京都内

生きものと相談しながら創る自然と共存する未来都市を提案する学習

京都府 京都市

歴史ある都市で、人々の記憶や記録を活かした自然と共存する未来都市の提案

三重県 宮川上流

獣害や耕作放棄地の増加といった問題を資源化する取り組みお茶のブランド化事業など
・3～7ページ掲載

沖縄県 宜野湾市

信仰の対象となってきた泉群（カー）や地下水脈が生み出した地元の特産物（タイム）のブランド化

沖縄県 宮古島市

島で唯一の水源である地下水の保全のために、地域の特徴を活かした方法で考え、提案する学習



学習展開事例1－1

地域に魔法をかけ、町全体をお宝に変える取り組み

～ 三重県度会郡大紀町 ～

秘境大台ヶ原に源を発する清流宮川の流域は、豊かな自然に恵まれている一方で、急激な過疎化や高齢化に加え、獣害や土砂災害などの問題を抱えています。かつては、林業が盛んに行われ、今でも伊勢茶や松坂牛の産地として知られています。また、宮川源流部にある大台ヶ原周辺は、最後まで日本狼が生息していた地域としても知られています。滝原宮があるなど伊勢神宮ゆかりの地として、日本の古くからの伝統や文化が残されている地域でもあります。

ここでは、子ども達と地域の特徴を見直し、それらを活かした自然と共存する町づくりの提案を行っています。ここでの学習のポイントは、自然環境の保全と地域活性化の一体化です。そして、自然や文化といった地域の特徴を活かしながら事業を興し、問題を資源化することで地域を元気にできる担い手の育成を目指しています。



1 生きものの目を通じて地域にある自然を見つめ直し、つながりに気づく

三重県度会郡大紀町の小学校では、地域のお宝探しの学習を行っています。「地域の自慢できるものは何？ どんなお宝がある？」という問いかけから学習は始まりました。はじめに、子ども達が「宝物」として選んだものは、松阪牛や名所旧跡などの以前から有名なものばかりでした。しかも、それらは特定の場所にあるもので、地域や町全体にはありません。そこで、子ども達に新たな問いかけをしました。「町のどこにでもあるもので、宝物に変えられそうなものを見つけよう。みんながまだ宝物だと気付いていないものを見つけよう。」ここから子ども達によるお宝探しが始まりました。

新たに始まったお宝探しは、地域を支える様々なつながりを探りながら進めていきました。地域を支えるつながりを理解するためには、地元に生息する生き物を手がかりにします。子ども達は、「生きものとお話する方法」を学習しながら、それぞれの生き物が生息する上で必要とする自然の中のつながりがどのようなものかを調べます。この学習をとおして、つながりの大切さを学び、地域に眠る様々なつながりを掘り起こしていきます。

「生きものとお話する方法」では、生き物の体のつくり、すみか、くらしがそれぞれどの様に関連しているかを学びます。他者の目になって見方を変え、見慣れたものを見直してみると、多くの発見や気づきを得ることができます。生き物の目になって地域を見直すことで、子ども達は今まで気付かなかった地域の特徴に関心を持つようになります。次に子ども達は生き物になったつもりで、地域の探検に出かけます。森の木を見ても、形や大きさなど様々な違いがあり、川を見ても、いろいろな大きさや形の石があったり、水の流れや温度などの違いがあることに気づきます。また、それらの違いを活かして多様な生き物が暮らしていることを知ります。地域の特徴は、地域に眠る多様性やつながりを掘り起こすことで見えてきます。

町の中を探検した子ども達は、今まで当たり前と思っていたものの中にも様々な意味が眠っていることや、それぞれの生き物が多様なものをそれぞれの方法で結び付けて暮らしていることに気づきました。そして子ども達は、昔の人々も地元に眠る多様なものを結び付け暮らしや文化を創り上げてきたに違いないと考えようになりました。そこで、子ども達はお年寄りから、地域の昔の暮らしや自然についての聞き取りを行いました。



2 当たり前にあるものをお宝に変える方法を考える

子ども達は学習を進めていくうちに、町に当たり前にあるものにも、多くの意味や価値が眠っているのではないかと考えるようになりました。見方を変えることで、当たり前にあるものから様々な意味や価値を掘り起こすことができるようになれば、それらをお宝に変えることができます。当たり前にならぬものがあるものが宝物にできれば、自分たちの町をまるごとお宝に変えられ、町全体を元気にできる!ということに気づきました。

町のどこにでもあって宝物に変えられそうなものは何か。子ども達は、宝探しに何度も出かけました。そして、何度も話し合いを重ねました。

2-1 問題を資源化して荒れていた茶畑を再生!

そうして子ども達が見つけた宝物は「お茶畑」でした。宮川流域は伊勢茶の産地として有名ですが、最近では農家の高齢化に伴い手入れがされずに放棄された茶畑が町の至る所で見られます。放棄された茶畑は、藪になって獣の住処や通り道になり、獣害を拡大させ深刻化させています。獣害については、子ども達も以前から関心を持っていました。

獣害と放棄された茶畑の関係(つながり)に気づいた子ども達は、お茶を「宝物」に変えようと考え、地域の大人達に茶畑の再生と無農薬栽培したお茶のブランド化を提案しました。子ども達は地域の大人達や企業の人たちの協力を得て、耕作放棄されたお茶畑を再生させ、お茶づくりを実現しました。このようなプロセスを経て生まれたお茶の価値や意味、そしてお茶に込められた自分達の思いを伝えるために、お茶のネーミングやパッケージデザインについて何度も話し合いを重ねました。皆が共感でつながり、多数決をせず決められた名前、それが『七保のお宝 あたたかきずな茶』です。このお茶は毎年生産され、地元を中心に販売されています。



2-2 豊かな森からの湧水【ふるさとのおくりもの】

お茶づくりに取り組んだ学年の次に新たなお宝探しに取り組んだ後輩たちは、町の大半を覆う森から湧き出る清らかな水を選びました。地元の人達から「木屋の水」と呼ばれ親しまれている湧き水が、なぜ美味しい水なのかを調べました。そして、この湧水も森や土や生き物、雨、石灰岩などのつながりによって生まれて来たことを知りました。石灰岩は大昔の貝やサンゴ礁が固まってできたもので、大昔の海の記憶が眠っています。水にもつながりを教えてくれる壮大な物語があることに、子ども達は気づきました。

子ども達は、地域の人達につながるの大切さを伝えるために、木屋の水をボトルリングして、水の物語(パンフレット)と一緒に配りました。



2-3 木と生きものからのメッセージ

このお宝探しの学習は、毎年後輩たちに引き継がれています。子ども達が、町のどこにでもあるものを宝物に変える学習を続けています。次に、お宝に選ばれたのは「木と生きもの」。町の大半を占めている森をもっと活かした町づくりはできないか、多くの生き物とうまく一緒に生きていく方法を考えて獣害問題を解決できないかというメッセージを込めた木工品を作り、地域の人達に配る取り組みをしました。



3 地域の問題を資源に変えて未来のまちづくりを考える

これらの学習では、過疎化や獣害などの地域が抱える課題や問題をどのようにしたら解決できるのか、単に対策や方法を考えるのではなく、地域全体に眠るつながりや意味や価値の発掘を行い、地域の問題や課題を広い視野で捉え直し、地域の特色を最大限に活かした新たな価値を創造することで、問題を解決に導くことができる未来に向けたポジティブな力を持つ子ども達を育てることを目的に、地域の多様な主体が協働して取り組んでいます。

このような学習を支える多様な主体による協働

地域住民主体の地域活性化に長年取り組んできた「野原村元気づくり協議会」では、地元の活性化に子ども達も参加してもらいたいと以前から願っていました。アサザ基金の出前授業をきっかけに地元の小学校と協議会の連携が始まり、大紀町や三重県の支援によって続けられています。

また、キヤノンマーケティングジャパン株式会社が「未来につなぐふるさとプロジェクト」の一環として、参加、支援を行っています。



○ 学習の継続、卒業した後も続けていきたいという子ども達が塾をつくる

小学校で地域のお宝探し学習を経験した生徒達が、卒業後もこれまでの学習を継続していきたいと塾を立ち上げ自主的に集まって活動を始めました。お茶の生産量を増やして荒れた茶畑の再生を進めることや、新商品の開発など、自然やつながりを活かした町づくりに取り組み、未来の地域の担い手となることを目指して活動しています。



○ 山村から全国に向けて発信する!

自分達の学習をととして生まれた地域のブランド品や取り組みの内容について地域外に出て発表することは、子ども達が地元の特色をさらに理解し、次の展開に必要な課題を考える上で役立ちます。この小学校や未来塾の生徒は、茨城県牛久市のまちづくり学習発表会に何度も参加し発表を行ってきました。また、三重県内のイベントや東京都内にある三重県のアンテナショップ等で取り組みの紹介をしてお茶などの販路拡大にも取り組んでいます。このように地域の枠を超えて社会への働きかけを行うことで、子ども達の学習意欲をより強く引き出すことができました。

他の地域の人々に、自分たちの活動を紹介し、様々な意見やアドバイスを得ることで、子ども達の視野を広げると同時に、自分達の活動に自信と地域への誇りを持たせることができました。



学習展開事例 1—2

オオカミと考える獣害対策で町を元気にする取り組み

～三重県多気郡大台町～

宮川の最上流部に位置する三重県多気郡大台町は、壮大な大台ヶ原の山懷に抱かれた自然恵かな地域です。ここでも先に紹介した大紀町と同様に過疎化や獣害、森林荒廃、土砂崩れなどの問題が深刻化しています。この地域にある小学校の子ども達も、生き物とお話しをする方法を学び、地域のお宝探しの学習を行い、問題の資源化がテーマになりました。

学習する中で、とくに印象的だったのは、子ども達から何度も発せられた「害獣が増えたのは、日本オオカミがいなくなったからだ。」という言葉でした。宮川の上流域は絶滅した日本オオカミが最後まで生き残っていた地域といわれています。そのため、地域には、今でも日本オオカミへの思いや記憶が生きていることが、子ども達との対話を通して見えてきました。そこで、地域の深刻な課題である獣害の対策を、オオカミと相談しながら考える学習を行うことにしました。オオカミとお話しする方法を学び、オオカミの目になって獣害問題を見つめ直すことで、従来の獣害対策とは異なる発想が生まれてくると考えたからです。



1 自然観の変化から獣害問題を捉え直し、解決の糸口を探る

まず、日本オオカミの体のつくり、すみか、くらしを学び、オオカミの目で地域を見直してみることから始めました。また、日本オオカミがなぜ絶滅したのかを考えることで、自然と人間の関係の変化について学びました。

昔の人たちは、オオカミのことを山の神として尊敬しオオカミから様々なことを学んでいました。しかし、日本が近代化を歩む中で、自然と人間との関係も変化し、日本人のオオカミ観や自然観も大きく変わっていきました。オオカミを退治する『赤ずきんちゃん』のような、人間に都合の悪い生き物を悪者にして退治する童話が西洋から入り人々に浸透していきました。子ども達は、人々の自然観の変化や自然と人間との関係の変化が、日本オオカミの絶滅の背景にあることに気づきました。そして、獣害発生背景にも、同じような自然観や人と自然との関係性の変化があることに気づきました。

問題の真の解決には、何かを悪いと決め付けやっつけて無くすことではなく、悪くなってしまった相手との関係をいかにして良くすることができるのか、その方法を考えることが重要です。そのような発想の転換や新しい見方を身に付けることが必要であることを、子ども達に気付かせます。その上で、獣害対策について見直してみました。このような学習を、人々の記憶の中に生きている日本オオカミとの対話を通して進めていきました。

学習をとおして新しい発想の獣害対策を提案することができれば、地域から全国に発信していくことができるのではないかと。子ども達と、日本オオカミに教えてもらおう獣害対策づくりの学習を行っていました。



2 オオカミと対話しながら獣害対策を考える

まず、従来の獣害対策について調べました。これまでの獣害対策では、電気柵や爆音機などの単純な刺激の繰り返しで害獣を防ぐというのが主でしたが、獣の生活文脈の中で意味のある刺激でなければ、単純な刺激の繰り返しは獣はすぐに慣れてしまいます。害獣をただ追い払えばいいという発想には限界があります。同時に、なぜ野生動物が害獣になってしまったのか、その原因を考えなければなりません。自然林が人工林に変えられたり雑木林が荒れて自然の餌が減ったり、耕作放棄地が増えて藪化した所を害獣が利用したりすることが背景にあることを学びました。

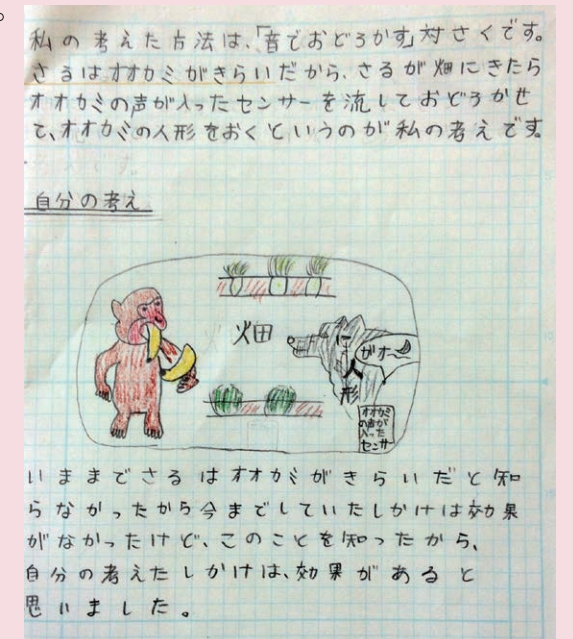
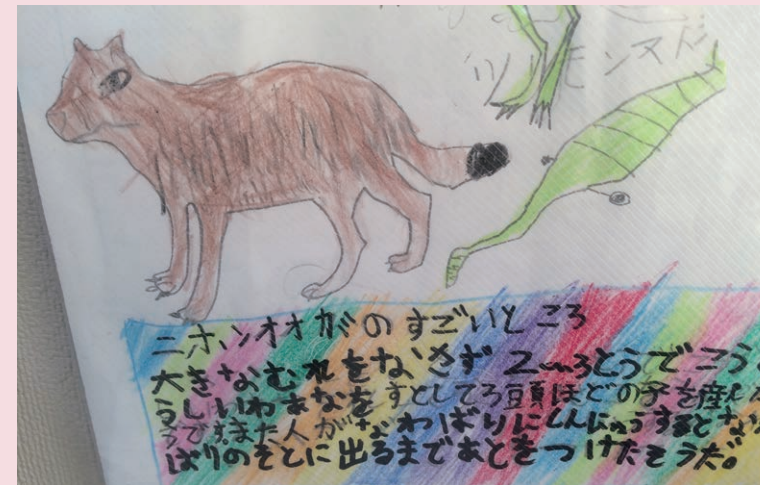
そして、自然と人間の関係が、どのように変化していったのかを考えました。

子ども達とは、一番初めに学習した生きものとお話しする方法を思い出しながら、具体的な獣害対策を考えました。害獣の体のつくりやすみか、暮らしを調べて、それぞれの生態を学習しました。さらに、オオカミについて調べたこととも合わせて、それぞれの害獣が生活文脈の中で「こわい」、「にがて」と思えるような対策を考えていきました。



3 自然との関係やつながりを取り戻し、活かす提案へ

子ども達はオオカミとの対話を通して、様々なユニークな獣害対策を考え出しました。「オオカミの声やにおい、目の光などを、オオカミの存在を意味するようにつなげて再現したらどうか?」「オオカミが獲物を襲う時の物音を再現したらどうか?」「オオカミの代わりになるように訓練した犬を貸し出す仕組みをつくったらどうか?」オオカミとお話ししながら考えた提案が次々と出てきました。たくさんの提案発表がされている中で、一人の男の子が言った、「鹿も猿も人も、みんなが一緒に生きられることが一番いいんじゃないかな」という言葉に周りの子ども達も反応し共感の輪が広がりました。



害獣が悪いんじゃない、悪くなっているのは人間と獣たちとの関係なのだから、これから関係をどうやって良くしていけばいいかを考えていくことが、未来の町づくりにつながることに皆が気付きました。

これらの学習を行ってきた子ども達は、問題を単に悪いものを減らしたり無くしたりすれば解決できるものとしてではなく、地域全体を視野に入れた大きなつながりの中で考えることで、悪くなってしまった関係をどのようにしたら改善できるかという視点を得ることができました。子ども達が環境問題に取り組む中で、このような能動的かつ価値創造的な姿勢を体得していくことが地域活性化と一体化した環境保全を進めていく上で重要となります。